

村内の河童伝説

語り継ぐ村史 「坂の村の先輩たちの足跡を慕って」より

昔、馬は大切な家畜で人間と続き屋根に住まわせる程。わけても戦国には、馬一頭が兵（男）4人に相当していました。軍馬が荷役馬として仁善寺で数頭を飼っていたと言います。馬牧場みたいだったかもしれません。

ある夜、この馬達がいななき騒ぐことに、対岸に住む飼い主の留吉（波田野康孝さんの祖先）は気付きました。激流の波の間をぬってかすかに聞こえてくる悲鳴にも近いその声が二晩も続いたので、翌朝囲いの周りを歩いてみると、川筋の芦の茂みの中に長い馬の尻尾が絡まっているのを見つけました、そうか、馬たちが騒ぐ理由はこれだったのか、それにしても何の仕業か、狸か狐かなど、不審に思った留吉は、その夜は寝ずの番と決め込みました。丑三つの刻をまわった頃、馬達が警戒の声を発しながら動揺しはじめました。「きたな」と留吉は用意していた竹鷲^{たけとび}を引き寄せ、風下からシノビ足で近付いて見ました。馬達は山手側に固まっていました。折しも、雲間からもれた微かな月明かりの中に人影らしいものを見つけました。「あの野郎人の馬を。それにしても小さい奴だな、まさか子供じゃあるまいて」と、腕に些^{いささ}か覚えのある留吉のこと「とっ捕まえてやる」と、馬の声で相手が気付かぬのを幸いに、傍らに竹鷲をそっと置き後ろから飛びかかりました。相手は「ゲエツ」の声で動きません。脆^{もろ}い奴だなと思ひながら、触った感じが妙に冷たかった。立ち上がって見下ろして、今度は留吉が「ゲエツ」と声をあげました。そこにはうつ伏せになって気絶している代物^{しろもの}を見て驚きました。仰向けにして見て、「こ奴どうやら河童に違げえねえ。話には聞いていて、想像はしていたが気味が悪いもんだ。チェ、薄気味悪い妖怪め、とは言うものどうしよう」と思案してみても相手が河童でははじまりません。ひとまず傍らにあった荒縄で添え木をして手足を二重、三重に縛り上げて、棚の細目の横木に吊しておくことにしました。眠気がさして、ついトロトロッとしました。

どの位たったのか「留吉トッチャン、父っつあん」の微かな自分を呼ぶ声で起こされました。「ああ、お前か、よく俺の名お知ってるな、それにしても馬の尻尾の毛をどうするんだ、この盗人野郎」の尻上がりの剣幕に、「勘弁して下さい。仕返しの積もりで、尻尾の毛を抜いたところ、彼らが痛がって騒ぐのがつい面白くなって」の河童のか細い声に、「ふてえ奴だ、そりゃあまたどうしてこうなっちゃったんだ」に「この間、

留さんがさっそうと馬の背中に^{また}跨がっているのを見てから、私も一度乗ってみたいもんだと思いたって何日か前だったか、夜中にここへ来て柵によじ上って頃合いを見計らって一匹に飛び乗ったんです、最初は馬の奴め、やけにおとなしく乗せてくれたのでついその気になっていたら、野郎いきなり立ち上がったので、ふいを食らっていやと言う程あそこの柵に叩きつけられたのです、暫く立ち上がれなかったが、やっとの思いでネグラへ転がり込んだが、やけにふしぶしが痛んで三日三晩動けなくなりました。腹はすくし痛みが和らいだので、無理して起き上がりようやく食べ物にありついた途端、急にこの馬めらの仕打ちが腹立たしくなって、仕返しをしてやろうとここへ来てあれやこれやと思案したのです。

最初は馬めら、俺の様子を警戒していましたが、そのうちに馴れ馴れしく俺が腰を下ろしている側へやって来ました。どう言う積もりか俺の鼻面を尻尾で振りたくりゃがった。俺りゃ無意識に手で払い除けたのさ。ところが奴めがギャアと抜かしたの、びっくりして俺の手元をみりゃ奴のシッポの毛が3~4本絡まっているじゃねえか。ひよんなことで、^{かたきう}敵討ちの仕方を彼らが教えてくれたって寸法よ。後は面白半分ってとこ」

「ふてえ奴め、身勝手な逆恨みもはなはだしい。みせしめに、当分そのままでいろ」と言いながら立ち上がった。「父っつあんその通りだ、俺が悪かった、もう悪戯は決してしねえ。罰とは言え、添え木をしてくれていてもさっきから手足が痛んで泣きたいくらいだ。堪忍してくれ」と河童は哀願しました。「自業自得ってもんよ。てめえのお陰で俺まで寝不足になってしまった。馬達の気持ちにもなってみろ。ここはまあ諦めて2.3日は我慢しているよ」の答えに、いよいよ河童は半ベソとなって「勘弁してくれ。このまんまじゃ、頭の皿が乾いて死んじまう。助けてくれえ」

留はからかってみたものの、はなから逃がしてやる積もりでした。留が無言なので、河童は声を振り絞って「このまんま見逃してくれたら、必ずお礼はさせて貰うから頼むで助けてくれ」と泣き出しました。哀れに思っていた留は、「わかった、わかった、もう悪戯は絶対にするなよ」と河童の手足をさすりながら解いて放してやりました。「父っあん、ありがとう。明日の朝必ずあの柵の所へお礼の品を届けさせて貰います。やさしい留めさんで助かりました。ありがとう」と川下の深みへ潜って消えていきました。

翌朝のこと、その柵に道具一式に巻紙が添えられて縛りつけられてあったと言います。その口上に^{いわ}曰く「先ずこの仕様のとおりに薬をつくりなされ。この薬は人々の口の中にできるあらゆる傷や腫れ物に塗れば、一晚にして必ず治癒して喜ばれる妙薬と

なる筈じゃ。世のため、人のためにせいぜい長生きしなはれ、そして代々の家伝の薬とするように」と記されていたと言います。以来留さんの家の波田野家は、河童の恩返しの口中^{こうちゅういしや}医者と言われて代々栄えたと言います。現在も子孫にあたる泰孝さんが口中薬の秘宝を継承しています。

実際、数年前まで村外、また県外からこの伝説を知っている人から、この妙薬が手に入らないかとの問い合わせが村内在住の知り合いの元にあり、波田野家に頼んで薬を作ってもらい、送ってあげたところ病が完治し喜ばれたとの本当の話がある。

また、今は空き家になっているが、数年前まで波田野家に一人で住んでいた嫁の^{よみ}4女さん（倉ノ平の熊谷家の4女で波田野家に嫁いできた）に聞いた話では、この薬の作り方を何人かに教えてあげたが、私の家で作るようには出来なかった、これはやっぱり波田野家だけでしか出来ないのかも知れんなーと言っていた。

この話は、10年程前阿智村上清内路の手作り花火大会で打ち上げる、第三国の筒に使う孟宗竹を探していた人から相談を受けた村内の人が、たまたま波田野家の竹林に、この筒に適した孟宗竹が自生しているのを見つけ、四女さんをお願いしに行ったさいに、4女さん自身から聞いた話です。

今でも、上清内路の第三国花火の筒はこの竹林から選ばれ使われております。

この筒に使う竹の質の条件はとても厳しく、他の竹林ではなかなか無いそうです。